慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	諏訪市湖南地区南真志野の教育：現地調査中間報告
Sub Title	The past and present of education in Minami-Majino
Author	佐原, 六郎(Sahara, Rokuro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1965
Jtitle	哲學 No.46 (1965. 2) ,p.367- 389
JaLC DOI	
Abstract	As a member of the Keio Society for the Study of Rural Communities, I undertook to investigate the past and present of educational. A conditions in and about Minami-Majino, a small forming village recently annexed to the city of Suwa, Nagano Prefecture. For this purpose, I adopted the following seven procedures : (1) to collect and look through as many old documents and other materials as possible, (2) to conduct interviews with the old-timers in the village in order to hear their views on the educational conditions in the past,. (3) to conduct interviews with some parents of school children and leaders of the P.T.A. in order to learn about the present state of affairs of education, (4) to have a conference with teachers of the elementary and. junior high schools to discuss some problems of school education, (5) to investigate school children's attitudes toward their families, school, village and so on, by means of a questionaire method, (6) to have a meeting with some members of the Board of Education to hear from them their plans of administration concerning the school and the social education of the city, (7) to coduct interviews with some leaders of Young Men's Association, Women's Society, Public Hall and Nursery School in order to know their activities in the social education. Ref Bring to the outcome of my investigation, I gave, in these papers, a report on (a) the existing conditions of Suwa-Nishi Junior High School and Konami Elementary School in Minami-Majino, (b), historic facts of terakoyas, old private schools, before the Meiji era and elementary schools in the early days of the Meiji era in and about Minami-Majino.
Notes	橋本孝先生古希記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000046-0375

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

諏訪市湖南地区南真志野の教育

The Past and Present of Education in Minami-Majino

——現地調査中間報告——

佐　原　六　郎

まえがき

慶応大学村落調査会が「村落における氏神祭祀組織と政治経済構造との関連」の解明を目標として南真志野(諏訪市湖南地区)という村落とその周辺の調査研究をはじめて既に6年余の年月を経過した．その研究成果の1部は共同研究者の所属する学部または研究科の機関誌[1]，謄写版刷仮綴の報告書，学会での口頭報告などでかなり多く発表されているが，まだ全体としてのまとまつた結果を公表しうる段階には達していない．それは現地在住有志各位の格別の好意によつて，予想より遙かに多量の文書が相次いで発見され，提供されているので，それらを整理，分類，検討し，更に筆写またはマイクロ・フィルムに複写するのに意外の長時間を要すること，また10数名の研究者が多数の学生をも参加させて，大学における本務の余暇をさいて現地の持続的踏査を企てることなどが，時間上，経済上決して容易でないからでもある．私は社会心理学班の1員として社会学班，史学班，経済学班の諸君に協力し，特に「村落構造と農民意識の変化」を主題とする調査研究を進めているが，他方村民とその子弟の行動に及ぼす教育の影響を無視すべきでないと考えて湖南地区に於ける教育事情に注意を

向け，次の7項目の手段を用いて調査をはじめた．(1) できるだけ現地とその周辺の教育に関する公有，私有の文書その他の資料を探索，検討すること，(2) 旧時の教育事情に詳しい現地の古老に面接して，その直話を聞くこと，(3) 学校の父兄や PTA の役員の所見を聴取すること，(4) 学校教員との懇談を遂げること，(5) 生徒を対象とする数種の質問紙による調査を試み，しかもいわゆる町の子と村の子とを比較するため，南真志野の小，中学校で行つたと同じ質問紙調査を上諏訪の小，中学校でも試みること．(6) 市の教育委員その他の教育行政担当者と面談し，資料その他に関する助言を求め，学校教育と社会教育との両面にわたる事情を調べること，(7) 現地の青年会，婦人会，公民館，保育園などの活動状況を視察し，その当事者の経験，意見その他を聞くこと．私達は以上7項目の手段を一応実行したのではあるが，調査の完了，殊に結果の整理と集計にはなお相当の日時を必要とする．それ故紙数の制限もあるので，ここでは社会教育の面には触れず，学校教育についての中間報告を試るにとどめておく．

I 諏訪西中学校

昭和37年7月25日，私は2人の共同研究者[2]と南真志野の諏訪西中学校（湖南，中洲，豊田の3中学校を合併した統合中学校）を訪れ，吉江校長はじめ各科目担当教員の殆ど全員（22人）と二階畳敷大広間に会し，約2時間にわたる座談会を開いた．その時話題になつたいろいろの問題のうちここではまず卒業後の生徒の進む方向について述べてみよう．次に示す第1表[3]は昭和36年に実質的統合を遂げる前の湖南中学校で義務教育を終えたもののうち昭和22年から35年までの卒業者について調べたものである．この表によると以上の14年間の卒業者のうち家事に従事するものは大体において漸減し，就職するものは28年度を頂点としてそれ以前に遡り，また以後に進むにつれて漸減している．これに反して進学者は常に漸増の傾向

第1表　旧湖南中学校生徒卒業後の状況 (36. 6. 1)

昭和	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
卒業者	42	58	93	106	90	97	77	76	96	86	98	77	92	63
家事従業者	28	24	20	28	12	13	9	14	10	9	3	4	1	1
就職者	18	27	36	39	40	43	37	30	34	30	44	28	35	18
進学者	6	7	37	39	38	41	31	32	42	47	51	45	56	44

第2表　諏訪市内3中学校の教員，学級，生徒数 (36.5.1)

学校名	教員数	学級数	生徒数			
			総計	1年	2年	3年
上諏訪中学校	44	30	1421	469	554	398
諏訪中学校	24	15	712	247	268	197
諏訪西中学校	23	15	670	200	241	229
合計	91	60	2803	916	1063	824

第3表　諏訪市内3中学校生徒卒業後の状況 (36.6.1)

状況別	3中学校卒業生		
	総数	男	女
総数	603	329	274
進学者	436	244	192
就職者	104	54	50
就職しつつ進学している者	41	17	24
無業	16	11	5
死亡	—	—	—
不詳	6	3	3

を示している．なお参考のため第2，3表[4]によつて諏訪市内3中学校の生徒，学級，教員の数と，生徒卒業後の状況とを示しておく．

他方以上3中学校の36年度卒業者のうち就職したものを産業別にみると，全員を105人として，その66.2%は精密工業，10.3%は機械製造業，11.7%はその他の製造業となつていて，他の非製造業的職業に就いたのは11.8%である．これによつても公差の非常に少く，また寸法精度の極めてやかましい精密工業への就職率のいかに高いかが窺われる．諏訪西中学の吉江校長及び林武朗教諭の話によると，同校の3年生は夏頃すでに就職か，進学かの方針を大体きめているようだが，もし生徒の希望をそのまま許すならば，その多くは諏訪精工舎[5]に就職したがるであろう．36年度のこの学校の精工舎就職志望者は8名で，そのうち5〜6名が就職試験

第4表　諏訪西中学校生徒数
(36.4.10)

学　　年	生徒数		
	男	女	計
1　　年	123	130	253
2　　年	104	97	201
3　　年	125	116	241
3年1組	25	23	48
3年2組	25	24	49
3年3組	25	23	48
3年4組	25	23	48
3年5組	25	23	48

に合格したという．なおこの学校が後述する如く中洲，豊田の両中学と合併し，更に実質的統合中学として1個所で授業を行うようになつたのは36年4月であつて，その時の生徒数は未統合の時よりはるかに増加して第4表の如くである．従つて卒業生の数も第1表の場合よりはこの年度から激増した．しかし統合中学3年生の1組を50人とみて，就職希望者はせいぜい10人位で，他の 80% は進学するそうであるから就職に対する生徒全体の関心はむしろ高校卒業の時に一層切実となる．かつては蚕糸王国と誇つた諏訪地方も今ではオルゴール，レンズ，時計などの工場が次々と増設されて，たとえば精工社の会社案内のパンフレットを見ても「諏訪一帯は風光の明媚，高原特有の気象，その他の環境条件からして東洋のスイスの名をもつて知られ，また諏訪精密工業地帯とも称されている，信州諏訪人の緻密で繊細，研究心の旺盛な特性に加えるに美しい風土，温泉，天然ガスなど天然の恵みは近代工業の粋を集め，その先端をいく精密工業には最適の地とされている」というような意味のことが書かれている．

諏訪西中学卒業者の就職先としては精工舎のほかに，同社の関連工場の浜沢工業（諏訪市），高木工業（下諏訪町），また東洋バルブ株式会社系統の北沢工業（諏訪市），8mm 映写機製作の三協光学工業（諏訪市）などがあり，またズームレンズの三信光学工業（諏訪市），写真機用レンズ製作の日東光学（諏訪市），通信機用蓄電器の日本コンデンサー（諏訪市），通信機部品の花岡工業（諏訪市）などがある．このように求人率の高い会社が比較的に多いこの地方では中学卒業者の県外就職は極めて少く，36年度ではわずかに3% に過ぎない．農民の子弟が遠隔の大都市にではなく，附

近の精密工業に憧れてどしどし就職することもまた湖南地区の農民にとつては一種の脅威で，彼等は農業の合理的共同経営化と機械化を達成してこれに対抗するか，或はそのまま農業の自滅をまつかの問題に当面せざるを得なくなつている．なお西中学校では職業安定所から送附される資料に基いて生徒，親，学校，職場の4者が最後的に話し合つて生徒の就職先を決定するという．もちろんその場合本人の適性，企業の将来性，家庭の事情，通勤距離なども考慮されるが，現在では求人競争もかなり激しいので，生徒も賃金や厚生施設などのよくないところは敬遠しがちである．何れにしても進学せずに働こうとする者が農業を離れて会社勤めをしたがる傾向の強いことは私達の試みた質問紙法による調査でも明かに示されている．私達はまた37年7月26日に上諏訪の精工社を訪れ，事務所の男220，女170，製作工場の男390，女720，合計1500人の働く現場を視察したが，すべての点で大都市の一流工場における作業状況や施設に劣るものとは思えなかつた．殊にこの地方の空気が清澄で，湿度の常に低いのは何よりの魅力であり，また市民の多くが精密工業の発達に誇りを感じ，その進展に希望を抱いていることは明かであつて，この事実がまたこの地方の農民の子弟に大きな影響を与えていることも否定できない．

次に西中学校生徒の進学状況をみると36年度の3年生は第4表に示したように例年より大分多いので，進学希望者の全員を第1志望の高校に無事入学させるのはやや困難ではないかと心配されていた．しかし私立高校に進むものが増せば問題なく全部片ずくというのが先生方の見解であつた．ここでも参考のため諏訪市内の3県立高校の教員，生徒の数と生徒卒業後の状況とを第5表に示しておく．

第5表の3高校のほかに近在の県立高校には岡谷南，岡谷東（女子），岡谷工業（機械，電気，工業化学），茅野（普通科，被服科），富士見（普通科，農業科），辰野（普通科，商業科）の諸高校があり，また市立では岡谷竜城高校（定時制専門学校）がある．そのほかに私立の信州工業（塩尻），帝

第 5 表　諏訪市内県立高校教員，生徒数
(36.5.1)

学校名	教員数	生徒数				
		総数	1 年	2 年	3 年	4 年
諏訪清陵高等学校	37	792	252	268	272	
諏訪二葉高等学校	37	824	266	281	277	
諏訪実業高等学校	43	997	288	300	289	120
合計	117	2613	806	849	838	120

第 6 表　諏訪市内 3 県立高校生徒卒業後の状況
(36.6.1)

状況別	3 高等学校生徒数		
	総数	男	女
総数	891	441	450
進学者	220	139	81
就職者	550	220	330
無業	121	82	39

京第 3 (小渕沢)，長坂，塚原（松本市)，岡谷高等家政などの高校があり，長坂と帝京第 3 は通学可能の距離にあるので西中学から入学する生徒も案外少くないという．

西中学及びその前身の湖南中学の両校の歴史は，まだ創立後年月が浅いので，その詳細を語る印刷物はできていないらしい．そこで次に両校の歴代校長の書きとめた記録と諏訪市教育長から聞いた話とによつて大体の略史を記述してみよう．昭和 22 年 4 月 29 日に南真志野では六三制の湖南中学校開校式が行われた．その時の校長は雨宮穣，教務は藤森定能，教諭は矢島源七，金子清武，山田チヨ，笠原貢，平林一美，三輪美奈良の 6 名であつた．このほかに内科，歯科，眼科の各医師が関係しており，PTA 会長には村長の伊藤専一郎が選任された．生徒は男 104，女 107，計 211 人で小規模の学校であつた．同年 8 月 20 日に父母と先生の会が発足し，その総会で校舎の増築が決議され，23 年 12 月 8 日に増築校舎落成式が行われた．その後，25 年から校長となつた木川千年は 30 年まで在職したが，その間28年2月24日午後11時 30 分頃，隣接の湖南小学校から突如発した火事は同校を全焼した後，更に中学校を延焼し，1 棟を残して翌朝12時10分頃鎮火した．湖南小学校所蔵の「学校火災と校舎建築」に関する書類によると焼失及び残存校舎の棟数と坪数は第7表の如くである．しかし同年3月 3

日には小中学校復興委員会が結成され，村長の赤羽増雄を委員長とする合計112名の各種委員が前後75回にわたる会合を開いて復興[6]に尽力した．また一般村民もよく協力して1戸当り5日，延べ3750人が整地灰掻きなどの作業のため勤労奉仕した．他方東京在住の同郷人達も湖南学校後援会を組織して拠金したので，村外からの寄附金，見舞金は2,792,000円に達した．かくて復興費も起債，寄附金，火災保険，雑収入を合計して42,215,200円となり，28年4月20日から11月10日までの間に小学校2棟，中学校1棟，小・中両校共用体育館，同じく共用の附属建築物が新築されて11月14日にその落成式が挙行された．

第7表　湖南小，中学校焼失及び残存校舎坪数

学　校	棟	坪
湖南小学校	5	864.5
湖南中学校	2	330.5
計	7	1195
残存校舎	1	209

昭和30年，諏訪郡湖南村は諏訪市に合併され，中学校も諏訪市立湖南中学校と呼ばれるようになつた．しかしその後33年には中洲，豊田の両村の新制中学校と湖南中学校とを合併するための統合中学校促進委員会が結成され，市当局に陳情して土地購入費350万円を獲得，校地拡大の土地買収に成功した．34年4月2日，以上三村の既存中学校を統合する市立諏訪西中学校が誕生，その開校式には中洲，豊田の両中学校生徒も出席したが，35年に1744万円を投じて新築した統合中学校校舎の完成するまでは，もと通り三村に分れた授業が続けられた．新しい統合中学の校長は矢口力，教頭は石田勲で，そのもとに中洲部長の牛尼好蔵，豊田部長の小松正晴（後に部長代理の古原源之助）がそれぞれ両部の責任を分担した．その後中洲，豊田両部を廃して諏訪西中学校が南真志野の校舎だけで授業を行う実質的統合中学校となつたのは36年4月3日，吉江寛校長と柿沢仁裟久教頭の時である．

以上は主として学校側の記録に基いて述べたのであるが，諏訪市教育委員会側の話によると，市では12～24学級を統合中学校の適性規模と定め

ていたが，湖南，中洲，豊田の3校を合併すると 12～19 学級となるので，その合併を実現して一つの市立統合中学校新設の方針を立てた．ここで私達の問題としたのは新しく統合される学校を三村のうちのどこに設置すべきかについて何か意見の衝突か紛争が起りはしなかつたかということである．この点について南真志野の識者数名に尋ねてみたが，別にそのような衝突はなかつたようである．また市の小口幸雄教育長も同様に紛争などはなかつたと答えた．教育長の話によると市でははじめ三村の丁度真中に当る地点に学校を建てることも考えたが，その地点は田地で，しかも地盤が弱いので，不適当と認められた．そこで立派な校舎の新築されて間もない湖南中学の校舎を使用し，更に校舎を増築するのが一番よいということになつたのであつて，決して村々からのまちまちの陳情や運動に動かされて決定したのではないと．ただその頃，福島地区の少数の人が子供を上諏訪中学校へ通学させる方が距離の上で近いから学区を変更してくれと陳情した．そこで実測をしてみると，やはり諏訪西中学校の方が近いことが証明されたので．陳情者もよく納得したという．

なお 37 年度西中学校全校教員の最終出身校を調べると信州大学教育学部6人（うち4年卒 4，2 年卒 2)，長野師範4人で，その他は旧松本高校，東京師範 (?)，青山師範，第一高等学校（中退)，早稲田大学文学部(中退)，早大専門部，東京物理学校，横浜専門学校（法科)，愛知工業専門，大阪市立工業，立命館大学，長岡工業専門，岡谷工業の諸学校が各 1 名づつである．また彼等の現住地は大熊 2，田辺（たんべ）1，豊田 5，四賀2人であり，その他は諏訪市内 6，下諏訪町 3，岡谷市 4，茅野市1人で，事務の人を除き，南真志野に住むものは1人もいない．教員の出身校や現住地は今日の教育にとつて，左程重要な要因とはならないが，西中学校の場合のようにある学校，ある住地にのみ偏していないことは，むしろ生徒にとつて教育上よい結果をもたらすのではないかと思う．

II 湖南小学校

南真志野の小学校が明治19年4月10日公布の小学校令に従つて湖南尋常高等小学校(尋常は4年，高等ははじめ2年，後4年となる)となつたのは明治23年2月28日の開校式のときからである．その後明治41年には義務教育年限の延長で尋常科は6年となつた．昭和16年には国民学校令によつて湖南国民学校と呼ばれ，更に21年からは現在の(市立)湖南小学校となつた．昭和37年7月26日，私達は同小学校を訪れ，五味新平校長，関広視教頭はじめ13名の全教員と座談会形式の懇談を畳敷大広間で遂げた．その時この学校は10学級359人の生徒をもち，この外に後山と板沢の分校があつて，前者は1年から6年までの生徒合せて38人，後者は1～4年までの生徒12人で，5，6年生は湖南小学の本校に通つていた．第8表[7]は

第8表　湖南小学校教員，学級，生徒数

小学校	教員数	学級数	生徒数						
			総数	1年	2年	3年	4年	5年	6年
湖南小学校	13	10	359	45	44	54	57	69	90
同　後山分校	3	3	38	7	8	6	3	7	7
同　板沢分校	1	1	12	2	1	3	6		
合計	17	14	409	54	53	63	66	76	97

後山，板沢の両分校をも含めた湖南小学校の教員，学級，生徒数を示したものである．また教員の最終出身校をみると，長野師範5，信州大学教育学部3(4年卒1，2年卒2)で次の諸学校は何れも1人ずつである．旧制諏訪中学，諏訪清陵高校，岡谷高等家政，都留文化大学，松本市立高校，大東文化学院，京城女子師範．なお教員の現住地は北真志野，大熊，後山，上諏訪が各3人，豊田，中洲，板沢，下諏訪が各1名づつで，地元の南真志野には1人もいない．

さて上記の座談会で聞いた話のうち興味を覚えたことの幾つかを記せば次の如くである．(1) 他の小学校との交流は研究会その他で行われるが，中学校との交流は，隣りに在りながら，少ない．(2) この学校の在る地域は分水嶺の北東斜面の丘陵下部に当るので日没が早く，特に冬は午後3時頃すでに暗くなつてそれ以後の授業にさしつかえる．そのためこの辺は半日村と呼ばれている．(3) 運動会は秋に行われるが，賞品は出さない．(4) 生徒の家は互にかなり離れているので，隣近所としての生徒のまとまりは悪い．遊びは主として学校内で行われるので，生徒間には同じ部落民としての結合意識が薄い．(5) 男子は球技が好きで，よくやる．そのほかに釣，スケート（冬期，村の水田の一部をスケート場とする），水泳（35年7月に立派なプールが校庭内にできた），なども仲々盛んである．(6)伝統的行事としての秋葉様の火祭りや天神講，稲虫送り，上諏訪の灯籠流しなどに楽しんで参加する生徒もいる．その他．

ここで注意したいのはスケートに対する生徒の関心の強いことである．諏訪にスケート競技の移入されたのは鉄道中央線開通の明治 39 年1月頃とされているが，以後 20 年間におけるこのスポーツの普及流行は極めてめざましく，例えば大正 14 年の調査[8]によると，高島小学校尋常6年の男子は82.5%，女子は60%，同校高等科2年では男子95.1%，女子74.6%，がスケートを習熟していたという．ところが南真志野公民館の郷倉には「明治44年2月7日発会式を南真志野字神田に於て挙行す．南真スケート会」と明記した記録が残つている．この記録は南真スケート会（南真氷滑会）の明治44年2月に作られた寄附人名簿の第1頁に書かれたものであり，寄附者127人，会員 52 人の氏名も列記されている．しかも南真青年会の「明治44年度スケート会諸書類綴」（これも前掲の郷倉に保存されている）にはスケート競技会当日，小学校尋常1年から高等2年までの各学年の男女生徒のうち 1～3 等の優勝者に与えられた賞品の目録が示されていて，小さな小学生が村の青年会々員の間に入つてスケート競技に参加して

いたことを明かにしている．これによつても湖南小学校が諏訪人の誇る伝統的スポーツに決して後れをとらなかつたことがわかる．他方湖南小学校の野球については明治32年，原輝美の自筆になる「湖南野球初め」と題する文書が残つている．これによると明治27，8年頃，湖南小学校校長小林照三郎ははじめて同校の生徒に野球競技を教えた．初めはゴムマリで，掌や棒切れがバット代りに使用されたが31年頃から球（皮毬）やバットが採用されたという．その後原輝美自身も明治32年5月に会員14名から成る野球会を組織し，立派な会則を作つて活躍した．会則には「本会々場は湖南小学校の庭とす，但し臨時他の場所に於てなすことあるべし」とか，「本会員は湖南，豊田両村高等小学校2年以上の有志とす」などの規定があり，14名の会員氏名も明記されている．原は明治24年に尋常科1年に入学したのであるから野球会を作り，その会長となつたのは恐らく湖南小学校高等科3年生のときであつたろう．

湖南小学校には，例えば関嘉吉，両角喜重のように，長く村民から敬愛されている教員も少くないのであるが，原輝美をはじめ多くの識者が一致して景仰しているのは守屋喜七校長である．幸にして守屋については自叙伝[9]が出版されており，しかもそのうちには「湖南学校の4年」と題する思い出話が書かれている．これは湖南小学の歴史の1頁とも見られる興味深い記事であるから，以下少しくこれによつて当時の模様を述べてみよう．

守屋喜七は明治5年10月23日，上伊那藤沢村片倉に生れ，片倉学校，上諏訪の高島学校，長野尋常師範をそれぞれ卒業して明治29年諏訪高等小学校訓導となつた．次いで32年3月末湖南尋常高等小学校の訓導兼校長に任ぜられ，4年間を南真志野に過した後他の諸学校の校長，訓導などを歴任し，大正2年に長野県視学，13年には信濃教育会専任幹事となり，昭和20年7月2日逝去するまで終始教育の推進向上のために尽瘁した．

さて守屋は明治32年1月上諏訪学校訓導を辞任して暫く郷里に帰り佗び住いをしていた際，突然湖南村々長笠原謙吉郎と学務委員三村安治の訪

問をうけ，また同じく湖南村から来た多数の人々に押し寄せられて，断り切れず遂に止むを得ず3年間の約束で湖南小学校長就任を内諾し，同年3月正式に校長として赴任した．この時守屋は校長としての成敗は別として，自分がどれ位腕をふるい得るか，それをためしてみようという覚悟で任に就き，一挙一動，ただ自分の理想とする態度に出ようとばかり考えたという．村に知人なく，土地にも不案内の守屋は小学校の宿直室に単独生活を送り，孤島に住む流人の如く淋しく，ただ周囲の事相に目を配つていたに過ぎなかつた．ところが村の青年など校庭の桜が満開のときにはその朧月の晩を夜桜の見物に名をかりて，学校の庭に集つては子供の腰掛などを引き出して，守屋に聞けよがしに酒を飲みながら，盛んに俗謡詩吟などをうなつて青年の客気を示す有様であつた．守屋は赴任の当初，自分の性格が父兄との応待や学校事務の処理などに極めて不向きであるのを考えて，その欠陥を補うために上諏訪時代の同僚のうちから老練で事務に堪能な佐伯金作を選んで来任させ，また翌年には米沢から小池元武，上諏訪からは三沢精英を迎えて教員とし，先任教員である関佐一郎，関嘉吉，関嘉代次等を加えて湖南学校の新陣容を固めた．在職4年の間に守屋は学校内部の組織強化とその質の純潔化とに力を注いだばかりではなく，更に村の社会教育施設についても，可能と信ずることをすべて計画的に実現する基礎を作つた．彼の自叙伝中の「夢の跡」と題する回想記によつて湖南において彼が企てた主な仕事とその他の思い出とを次の11項[10]に要約して述べることにしよう．(1) 青年団の統一と文庫の創立，(2) 婦人会の設置，(3) 学校記念林の植付，(4) 女子就学の奨励，(5) 展覧会の開催と天神講の改良，(6) 教育費の増加を図つたこと，(7) 職員組織の改善，(8) 学校の増築と村民の反対，(9) 夜学会の統一，(10) 善光寺の隠寮，(11) 神宮寺の万屋，

以上11項のうち (1)，(2)，(9) は湖南村の社会教育[11]に関することであつて注目に価する．(5) の天神講についての守屋の記述によると8月25日の天神祭は古来何れの村落にも残つていたがその精神は失われて形式ばか

りとなり，多くは子供が酒食をする会合に終つていたので，守屋はその弊を去るため尋常3年以上の子供全体に習字や図画の成績品で灯籠を張り，それに点火して校庭にならべて吊したところを児童に観賞させ，また別に太鼓や笛で子供に唱歌や楽隊のまねごとをさせ，2時間ばかり学校で遊んでから帰宅するようにさせたというのである．今なお行われている天神講についての明治30年代の記事として興味深い．(8) は校舎の増築を断行しようとする校長と，これに反対する村民との激しい衝突事件を描写したもので両者の性格や行動がよく示されている．なお (11) の善光寺の隠寮というのは既述の真言宗智山派の善光寺内にある修業者の宿舎で，守屋は「この隠寮の4年の生活は今も忘れられないなつかしみを覚える．兄の子供が中学に通つていたので，それと自分夫婦に長女を加えて4人の家族であつた．云々」と書き残している．

はじめ3年の約束で赴任したのに4年の歳月を湖南学校に送つた守屋が，湖南における生活をいかに愉快に，また活動的に過したかは「今から考えて，この時ほど自分の意気が挙がり，その日その日の仕事に愉快にぶち当つて，職員相互に家庭的の融和を保ち得たことは，前後に例がなかつた」と述懐し，また「後山分教場の主任が欠けた時の如きも，単独一週間ばかりあの山中に入りこんで，直接教授の任に当つたこともあつた．冬の雪野を冒して板沢，後山分教場の視察などをしたり，自ら全校児童を引率して北真志野峠に全校訓練の隊列運動に号令をかけたりなど元気にまかせて，自分の勢一ぱいの力を揮つたものだ」と書いているが，私はこれを読んで今なお湖南の志ある人々の間に守屋の人望の絶えない理由がよく呑みこめたような気がする．

III 湖南小学校の前歴

(イ) 湖南地区の私塾

湖南小学校の前歴を辿ると明治6年まで遡ることができる．同年1月31日文部省布達の形式で筑摩(つかま)県令永山盛輝は管内小学校に命じて設立伺を提出させ，更にそれを文部省に送附して開校の許可を求めた．そしてその手続きを完了し，明治7年5月23日附で開校を許可されたのは諏訪地方だけで65校[12]に及んでいる．そのうち有賀村の尽心学校，真志野村の徽典学校[13]，文出村の成器学校，田辺村の惜陰学校は何れも現在の湖南地区及びその周辺に設置されたものである．

わが国では幕末維新の頃まで武家学校，藩学校，郷学校，私塾，寺小屋などさまざまの形式の学校が各地に普及しており，それらは明治になつても余命を保ち，やがて政府の立てた新学校制度の実施以前における仮設小学校の役目を果した．今その事情を諏訪地方について見るに，将軍綱吉が官学としての昌平坂学問所を開いたのに倣つて享和3年(1803)諏訪氏第7代藩主忠粛(ただたか)は家老諏訪氏の二の丸の邸のあとに長善館[14]という藩学を設けた．長善館の修業科目は剣道，砲術，弓道，習礼，儒学で，それぞれ専門の師範を任命していた．「諏訪の歴史[15]」の著者今井広亀によると，はじめは中小姓以上の子弟に限つて入学を許し，8才から30才まで各々日を定めて登校させ，そのうち15才から19才までのものは常詰(じょうずめ)と呼ばれて寄宿舎に収容され，その他は通稽古(かよいげいこ)とした．常詰が30～40人，通稽古が170人程あり，これを10人ほどの師範が教え，その費用はすべて藩のまかないで，監督は大目附の仕事であつた．講堂には聖座を設けて孔子を祠り，また毎月2日，8日には釈奠(せきてん)とて，孔子を祭る典礼を行つたという．

他方諏訪地方にも江戸中期以後，漢学，国学などを専門とする学者の開いた私塾や，庶民のなかで資力のある者の設けた寺小屋の類が多く栄えた．

私塾をも含む広義の寺小屋が全国にどれ位あつたかは不明であるが，明治になつてからの小学校よりも多く，少くとも全国に3万以上[16]は開設されたと見られている．今井広亀によると寺小屋は信州だけでも，1346個所あり，その数は全国第1位で，長野県の初等教育がいかに早くから進んでいたかを示している．そのうち諏訪郡には137個所あつて，県内第4位を占めていた．そして郡内でも四賀の横川庸広塾や河西伝右衛門塾などのように寛文11年(1671)からはじまつたものもあるが，多くは文化，文政(1804～1829)以後の設立であるという．次に湖南地区の私塾について少しく述べてみよう．

昭和37年9月末に私達[17]は岩波茂雄の遺徳を偲ぶため中洲村の信州風樹文庫を訪れた後，2日にわたつて南真志野を中心とする隣村を巡り，かつて私塾を開いて村内外の子弟に読み書き算術，その他の教育に当つたいわゆる御師匠様(ごつさま)と称された人の筆塚や記念碑を調べてみた．

湖南地区の私塾については幸にして湖南史談会の伊藤恒雄，金子茂が同会の長老上島佐吾吉，原輝美，関順治らの直話と古い文書などに基いて書いた「明治維新前湖南地区に於ける寺小屋教育について」と題する謄写版刷6頁の記述(昭和35年8月)がよい参考となるので，それを手掛りとして私達はまず田辺部落の御頭御社宮司社を訪れた．ここの境内には維新前の伊藤家私塾にゆかりのある天満宮の石祠(明和8年)が移建されていて，毎年春先に村の子供達はこの石祠に参詣し，天神祭りを行う．由緒ある武士の家柄に生れた伊藤弥治右衛門は明治初年の学制領布の頃まで宮川堤防に沿う広大な宅地に居を構え，主として田辺部落の子弟に読書算数を教える私塾を開いていた．彼は子供に対しては常にやさしかつたが，半面剛腹な人物で，ある時同家の籾干場に藩の家老が足を一歩踏み込んだとたん大喝一声怒鳴り飛ばしたという逸話が残つている．しかし彼は明治7年に，また同じくこの私塾で教鞭をとつた長男の八郎も11年にそれぞれ田辺の邸宅を引き払つて東京に移転したまま，その後の消息は不明だという．筆

塚はないが，もと伊藤家の屋敷西隅に祀られていた上述の石祠が今も私塾を偲ぶ記念として保存されているのである．

次に大熊部落には城山下の旧道添いに退筆塚碑と額書され，その下に浜平蔵(需軒と号す)の事蹟をこまかく陰刻した石碑が立つている．苔むした自然石台座上に立つ扁平石碑表面の漢文は需軒の人柄を語るよき記念である．需軒は寛政12年（1800）1月14日に生れ嘉永6年(1854) 8月28日に没した武士で高島藩に仕える傍ら自邸に私塾を開き，性寛厚雅重明哲，よく機宜を制し，その接するもの皆感恩悦服したという（筆塚碑文による）．また書道の達人で名筆をふるい，徳川将軍の別墅蒲田屋敷の屏風をはじめ，多くの書を残したが，南真志野の小，中学校を眼下に望む真言宗善光寺境内の薬師堂正面に掲げてある「瑠璃殿，需軒」としたためられた扁額は彼の書として村人に親しまれている．需軒が江戸詰めのため留守の折はその妻女が私塾で教鞭をとつたという．これまた当時としては珍しかつたのであろう．大熊城趾西寄りの台地には浜家の現当主潔の住む邸宅があるけれども，それは需軒の孫で，潔の父に当る徳蔵の建てたものである．需軒の長男堅蔵は私塾を相承するとともに，学制頒布以後は筑摩県吏となつた．また次男壮蔵は佐久間象山の門下生として国学を修めたが病弱のため思うような活動はできなかつた．堅蔵の子徳蔵もまた書道の達人で，村の役場に勤める傍ら現在その長男潔の住んでいる家の10畳間を手習所として村の子供に習字を教えていたという．

南真志野には鑑湖翁筆塚と額書された矢島震（字は雷公，通称春斎，鑑湖，号は生々堂，晩年は再蘇翁などと号す）の石碑がある．これも他の筆塚と同様に扁平の自然石に漢詩を刻んだものである．矢島家[18]はもともと手塚太郎光政の二男光信より起つた家で，光信ははじめ矢島帯刀（春意ともいう）と号し高島藩に仕えていたが，幼少の頃から藩医小寺維明の入室の弟子となり，儒と医を学んだ．成人後招かれて南真志野旧道添いの野明橋附近の地に移り，藩医を勤めながら村童教育の私塾を開き，ここを永住の

地と定めた．光信が天保4年(1833) 8月11日に没した後，家を継いだのが8代目の震，すなわち鑑湖で，彼は資性豪放磊落，体は長大魁偉，家学を修め，儒医を業とした．琴，棋碁，書，画をよくし藩公の寵を蒙ること篤かつた．越後の嵐渓に南画を学び，頼岳寺（諏訪市）の障壁画をはじめ，多くの佳品大作を残した．鑑湖が農村子弟の教育に極めて熱心であつたことは舌代[19]と書いた彼の廻し文を見ても明かにわかる．「近年寺子猥りに相成り不参勝ちにて僅かに冬春百日計り筆を把り夏秋大に廃す，是其親の厳しからざると，其師の厳しからざるとなり，十四，五才なる者は夏秋は農業を見習い又稼穡の手助にも相不成候へば，十二，三才以下の児童は実に遊戯のみなり，依て当春同季年中，五節句物日を除き，平日不参無之様其親々にも小用等もたさせ不申様御心掛なげうち万事学室に入り規則を守り出精致様御申付□成候，今日より日並書溜置候得ば，年内不参多き者は其親の不厳と其子不進となり，後に悔ゆることなかれ，学問に志し夜を以て日につぎ朝に誦みて夕に習い候ても難き学は此通りなり，まして不参の童子をや，正月二十五日時習斉．」この文は宛名34名の学童の親達に廻して読ませて注意を喚起したものと思われる．

鑑湖が還暦を迎えたとき村人は御堂の前に退筆を埋めて碑を建てようと提議した．ところが彼は自ら筆をとつて漢詩の筆塚歌を書いた．これが上述の鑑湖翁筆塚碑に刻まれたもので，その第1行には生々堂門人と書き，次に「雷公在世幾春秋肯将生涯寄風流所嗜是酒」の文をもつてはじまり「郷人猶慕翁風采為収退筆仮令蔵於密遺墨長向人間留」と結ぶ6行の詩が明かに読まれる．そして最後には明治12年12月，鉛山加藤晋撰，雪湖武居直種書，孝子矢島永貞建と刻まれている．この矢島永貞というのは藩医永田玄瑞の四男で，鑑湖の娘きみ子と結婚して矢島家の養子となり，春徳と号し，慶応4年(1867) 2月27日に他界した鑑湖（62才）のあとをうけて医業の傍ら私塾での村童の教育を続けた人である．永貞は明治27年3月6日，67才で歿し，その子正精（まさよし）は仁と徳とを兼備した名医で，学制領布

のとき，自らも教鞭をとつていた代々相承の私塾を閉じて後述する竜雲寺の真志野学校創設のために奔走し，また学務委員として村の教育に尽力し，更に晩年は全く医業に恵念して多くの人々の信望をうけ，大正9年5月，61 才で逝去した．

私達の探し求めて見学した石碑としては，なお北真志野の伊藤林左衛門のために渡辺千秋撰文，並木時習書の讃学碑（明治28年建）がある．林左衛門（矩意と号す）も父祖の時からの高島藩士で，城に勤める傍ら村民の願いを容れて児童のために読書算術などを教えた御師匠様であつた．天明6年(1786)7月4日の彼の死後はその子の慶左衛門，孫の信厚と相次いで高島城勤務の余暇に筆子の教育を怠らず，明治6年までその私塾を存続させたのである．けれども私の最も感心したのは慶安4年（1651）にはじめて開発されてから近年に至るまで全くの山間僻地として交通の極めて不便であつた後山新田部落[20]（海抜 1000 メートルの山間の小盆地集落）にすら関源左衛門という師匠のいたことである．源左衛門はこの新田村の名主で文化元年（1804）後山に生れ，明治12年に没したが，弘化年間から明治初年に至るまで後山と椚平（くぬぎけいら）の児童のために，百姓の傍ら，読書算盤を熱心に教えて怠ることがなかつた．彼の在世中，筆子の間に筆塚を建てる計画が進められたが，師匠の固辞によつて遂に実現しなかつたという．このような師匠がいて維新前既に初等教育の実を挙げていたからこそ明治8年，早くも真志野学校（湖南小学校の前身）の支校（分校）が辺鄙な後山にさえ設立されたのだと思う．

以上明かな資料で知りうるだけでも湖南の本村に5個所，後山に1個所，現在の小学校の数よりも多い私塾が栄えていたのである．

（ロ） 明治初年の小学校

明治4年(1871)の廃藩置県に際し，従来の263藩は何れも県に改められ，旧高島藩主諏訪忠礼（ただあや）は高島県知事に任ぜられた．しかし同年の11月には全国府県の大廃合が行われ，信濃の14県は皆廃されて，新しく筑摩県と長野

県とに統合された．その時の筑摩県は諏訪，伊那，筑摩，安曇の南信郡と飛騨国とを合せたもので県庁は松本城内に置かれた．けれども明治9年8月21日には筑摩県も廃止されて長野県に併合された．これより先明治4年8月18日にはわが国の文教行政統轄のための文部省が設置され，翌5年8月3日には文教史上一転機を作つた学制が発布されて学区，学校，教員，生徒などについての規定ができた．そしてその条文と共に公示された太政官布告第214号は四民平等と貧富貴賤の別なく国民の全部が就学して文盲を無くすこと，また国民各自が身を立て，産を治め，業を盛んにするには，その身を修め，知識を開き，才芸を長ずるようにしなければならないことを宣言した．国民全体のなかで学校就学者がわずかに20%に過ぎず，残りの80%ぐらいが無学であつたような当時として，政府のこの文教政策は全く画期的のものであつたと云わなければならない．さてその頃の筑摩県参事永山盛輝は6年2月24日の布告第12号で次の如く指示した．「当県創置以来追々有志者を募り，私費学校を施設し，当今毎区小学校第100番に及ばんとす．尚壬申7月学制御布告相成候後更に一層の条規相立候に付ては不日にして邑に不学の戸なく，家に不学の人なく，知識を開き，才芸を長じ，生を治め，産を興し，学を昌にするに至るべし，後略」と．また同年3月20日には筑摩県令としての永山は次の如き布告を発した．「今般学制御確定相成教育の道万事万般一範に帰候御趣旨の処，従前私塾家塾等相開候類教導方区々にて趣意不相貫候に付，一旦悉く相廃止候然上私塾等相開度願出候はば，試験の上更に可差許候条先般及布達置候学制及教則に依り見込相立，其当人の姓名年令，従前修業の手続き，学課，塾則，教科の順序等委細相認め，来る四月十五日限り可願出もの也，後略」と．

さて諏訪郡でもこの布告に基いて学校創立の活動をはじめ，明治5年6月5日には郡内世話係一同が長善館に集合し，26校の設置を決定し，それぞれ準備を進めた．このようにして多くの小学校が開設されるに至り，生徒も通学するようになつたが，当時設けられた小学校は従来の藩学校，私

塾，寺小屋などに小学校という名称をつけ，また以前からの御師匠様をそのまま小学校教員に任命した場合が多い．校舎も社寺の堂宇，民家，さては村芝居の舞台や行屋までも転用することがあつた．しかし従来の寺小屋が筆子を1人ずつ教える個人教授法をとつていたのに対し，小学校では1つの教室に収容された生徒の全体に一斉授業をする学級教授法が採用され，また教科もいわゆる読み書き算盤を改めて読物，問答，書取，算術，習字，作文などとなり，しかも机や椅子を用いることがはじまつた．文部省の制定した教科書も50音図，連語図，単語図などの掛け図類と共に使用されるようにもなつた．明治6年に開設された湖南村の田辺学校と真志野学校も大体以上の如き経過を辿つて発足したものである．

田辺学校[21]は明治6年に当時の田辺，大熊，中金子，下金子，福島，文出の6ヶ村が永久寺を校舎として開設した小学校である．教師は甲府出身の漢学者で，もと長善館助教の三村親広（当時26才）であつた．三村は武芸に達し，高島藩でも文武両道に優れた代表的人物として尊敬されていた．その号を惜陰斎と称したところから，彼の指導した田辺学校も惜陰学校と呼ばれたりした．生徒はますます増加したので永久寺の建物だけでは不足となり，村有の舞台を寺の隣りに移建して教室に当てた．学校の経営は高割（石高または取高に応じて租税などを割り当てること）によつて元資金を積み立て，その利息と授業料によつてまかなわれた．また学校世話役が数名選出されて学校の諸問題についての相談にあずかつた．なお当時の状況は明治7年1月25日，筑摩県吏原卓爾の巡視の際に提出した届書[22]によつて窺うことができる．それによると田辺は村高577石6斗2升9勺，戸数76，人口356（男185，女171），6才以上17才の児童83（男46，女37），内就学45（男42，女3），教員三村親広，藤森平助，世話役武居広利，太田勇助，小島孫右衛門，元資金400円となつている．なおこの届書では女生徒3人とあるが，その年の9月18日には12人の女生徒入学と記録されているので，この文書の所蔵者

小池良次はこれを督学効果の現れと見なしている．

徳高く恭謙温情の三村は教壇に立つこと9年，明治14年7月25日突如他界した．生徒は皆悲嘆にくれ，村民一同大きな衝撃をうけたが，やがて親広の弟，三村親学を迎えて後任者とした．親学もまたその性格兄に似て熱誠，よく生徒の指導に当つた．その後田辺学校は校舎の新築を計画したが制度の改革のために許可されず，明治19年で廃校となつた．私達は昭和37年9月30日に田辺学校址を訪れ，三村親広，同親学両師の徳を讃え，同校の来歴を記した大正3年建立の記念碑を視察したが，これには辻新次の篆額，門人浜幸次郎撰，寺島伝右衛門書の漢文が刻まれていた．

真志野学校　前述の田辺学校と同様に注目すべき湖南村の小学校は真志野学校である．矢島家私塾を開いた矢島光信の曽孫正精は学制領布の折に代々相承の私塾を閉じ，大いに奔走して明治6年にこの真志野学校を設置させた．その頃地元では沢組所有の土地を校有地として寄附し，学校はそれを農民に貸して年貢をおさめさせ，学校の費用に当てた．この学校ははじめ久しく村の南西山腹にある曹洞宗竜雲寺の本堂の1部，庫裏，玄関などを教室として使用していたので一般に竜雲寺学校と呼ばれ，明治23年10月に法律で地方学事通則，勅令で小学校令が公布されるまで存続した．なお真志野学校の詳しい歴史については未だ調査中であるため，ここでは明治12年の同校一覧表[23]を附記して当時の様子の一端を示すにとどめて置く．

明　細　一　覧　表　　真　志　野　学　校

明　治　12　年　自　1　月　至　12　月

校資歳額　458円

此訳　金　183.98円 ——積金　1515.8925円　の利子

金　150円　——附属地収益

金 201円.907——共 出 金

金 70円 ——生徒授業料

金 1円.435——諸 入 金

準訓導 津野清俊 **授業生** 伊藤信厚，原由之助，林忠六郎，矢沢金治，戸田通太郎，**戸長** 浜堅蔵 **世話役** 西沢初右衛門外 21 名 **生徒等級** 上等 1～7 級欠員，8 級男 6 人，下等 1 級 7 人（男 5，女 2），2 級 13 人（男 12，女 1），3 級 10 人（男 9，女 1），4 級 34 人（男 27，女 7），5 級 12 人（男 7，女 5），6 級 44 人（男 20，女 24），7 級 28 人（男 12，女 16），8 級 64 人（男 32，女 32） 合計 212 人（男 124，女 88）

註（1） 常盤政治，農業経済の再生産構造と農民層の分解，三田学会雑誌，53 巻 7 号
有賀喜左衛門，中井信彦，高橋正彦，高山隆三，山岸健，黒崎八州次良，仲康，宇野善康の各論文，慶大大学院社会学研究科紀要 第 1 号，1962．
米地実，村落における講と家連合，同社会学研究科紀要 第 2 号，1963．
大渕英雄，明治初年に於ける五戸組，哲学 第 44 集，1963．（慶大三田哲学会編）

（2） 宮家準，川鍋大．

（3） 第 1 表は宮家準が諏訪西中学校で調べた数を表化したものである．

（4） 第 2，3，5，6 の表は諏訪市要覧，1961 による．

（5） 昭和 35 年 5 月に東京都江東区亀戸町の株式会社第 2 精工社分工場であつた諏訪工場を株式会社諏訪精工舎とした．諏訪市上諏訪 289 番地所在．

（6） 小，中学校火災後の復興に関与した人々の協力体制と人間関係とは村の社会事情を知るためにもつと詳しく述べるべきであるが，ここでは省略する．

（7） 第 8 表で板沢分校の 5，6 年の生徒が欠けているのは，その学年の生徒は山を越えて南真志野の本校に通学するからである．なお佐原，宮家，山岸，大渕の 4 人は昭和 39 年 8 月 22 日に後山分校を視察した．

（8） 三沢勝衛，諏訪とスケート文化，諏訪中学校学友会誌 第 25 号，1925，p. 62．

（9） 守屋喜七自叙伝，信濃教育会編，1950．

（10） 前掲守屋喜七自叙伝 p. 53～61．

（11） 湖南地区の社会教育については他日稿を更めて詳述するが，守屋のこの記

事によつてかなり重要なことが明かになつた.

(12) 伊藤正和, 明治初年諏訪地方官立学校設立伺集計表, (季刊) 諏訪, 創刊号, 甲陽書房, 1961. p. 50f.

(13) 原輝美所蔵の文書によると, この学校ははじめ徽典学校と称し, 明治7年に至り地名をとつて真志野学校と改めた. 明治7年1月の同校諸費払帳の表紙には徽典学校と明記してある. 徽典学校または徽典館という名称は徳川幕府が甲府に設立した学校にも, また松前藩の藩立学校にも使用されたことがある.

(14) 今井広亀, 諏訪の歴史, 諏訪教育会編1962. 修訂4版 p. 253f. によると長善館は明治維新後旧藩主の好意で東京に移され, 上京した諏訪人の宿舎に当てられ, その後はもつぱら上京学生の寄宿舎となつて, 多くの諏訪出身の秀才を養成した, 今巣鴨にある長善館がそれであると.

(15) 今井広亀, 同上 p. 254.

(16) 海後宗臣, 教育制度, 文部時報, 日本の教育九十年, 1962. p. 7.

(17) 佐原, 宮家, 山岸.

(18) 諏訪史蹟要項 第17号 諏訪市湖南篇 p. 83～84.

(19) 熊沢直治所蔵.

(20) 小林正人 後山新田村の研究, (季刊) 諏訪 第2号, 1962, 諏訪地方文化研究会 p. 6～18.

(21) 田辺学校については湖南史談会の小池良次が. その所蔵する資料に基いて, 書いた騰写版刷4頁の記事 (1960) がある.

(22) 小池良次, 同上.

(23) 明治12年真志野学校一覧表は一枚の用紙に書かれたもので原輝美所蔵.

この現地調査実施に当つて格別の御支援を賜つた上島佐吾吉, 原輝美, 藤森正晴, 粂野正文, 伊藤喜七, 浜潔, 今井広亀, 小口幸雄, 藤森栄一の諸氏及び, 湖南小学校, 諏訪西中学校の先生方に対し深く感謝の意を表する.